

お人好し転生鍛冶師は
異世界で幸せを掴みます！・3

ものづくりチートで
らくらく転生ライフ

著 かむら

Illustration: リーん

ユレーナ

冒険者ギルドのマスター。
強者との戦闘が好き。

ノエル

猫獣人の少女。
持ち前の素早さを
活かして戦う。

ゲラルト

スーガルフ帝国の
冒険者ギルドマスター。
一見堅物だが……？

シヨーマ

超不幸体質だった少年が鍛冶師に転生した姿。
女神に与えられた規格外な能力で
異世界を楽しみつくす！

ゲイル

シヨーマが異世界で
初めて出会った冒険者
がさつだが情に厚い。

クラウス

領主の弟であり、
冒険者パーティのリーダー。
注意深い性格。

ミリアンヌ

高い実力を持つ魔導師。
ゲイルとは衝突しがち。

アカード

帝国の研究者。
人を人とも思わない危険人物。

Characters

はじまり

至って普通の高校生だった僕、剣持匠真^{けんもちしんま}は今、猫耳美少女と二人で空を飛んでいる。話せば長くなるんだけど……要は異世界に転生したのだ。

神様の手違いで極端な不幸体質に生まれついた僕は、運悪く命を落とした。そのお詫^わびとして『最高神』フォルティが転生させてくれたのだが、与えられた能力があまりに規格外！

僕の中では大したことをしたつもりはなくとも、様々な場面でやたら物々しい成果を生み出し、たびたび目立ってしまう始末。

そんな中、僕は獣人の少女、ノアルと出会い、行動を共にすることになった。彼女は故郷の村を魔物の大群に襲われて逃げてきたのだという。一人でも戻って戦おうとする彼女を見過ごすことが出来ず、僕はノアルと獣人国アラサドに向かった。

それからたどり着いたノアルの故郷の村は『隷属^{れいぞく}の輪』を嵌^はめられた魔物達に再び襲撃されており、僕とノアルもその戦いに参戦することに。その戦いにおいて、僕は新しく開発した浮空^{ふくう}右搭載^{ざいとう}型^{がた}戦輪^{せんりん}『プルニーマ』を駆使して、なんとか魔物達を駆逐^{くく}した。

重傷を負ったノアルのお父さん、ドレアスさんも強力な回復魔法のおかげで治療出来たし、全部

フォルティがくれた力のおかげだ。

でも、これで全てが終わったわけではない。魔物の襲撃にはどうやら何者かが関わっているようだ。僕とノアルは冒険者ギルドへの報告のため、拠点にしている街、ハゾットへと、新たに作り出した空飛ぶ板『スカイボード』に乗って帰っているところだった――

1 旅の報告

スカイボードに乗った僕達は、途中の休憩をいれても六時間もかからずにハゾットの街の近くまで戻ってこられた。

流石にこのまま街に行くと、門番の人達を驚かせてしまいそうなので、森の出口辺りに人がいないことを確認して着地する。

それにしても便利だなー、スカイボード。

普通に歩いたらもう一日必要な距離を、あっという間に走り抜けてしまった。道中、全く魔物との戦闘がなかったことも一つの要因だろう。

「……あっという間だった」

「そうだね。乗りこなすのも割と簡単だし、いい物作ったよ。あ、ノアルのスカイボード預かるね」

「……ん、お願い」

ノアルからスカイボードを預かって、僕のものに合わせてアイテムボックスにしまう。

街はすぐそこなので、そのまま休まず向かうことにした。

そして、森から出て街へと続く街道を歩いていると、見知った顔の人が三人立ってこちらを見ていることに気付いた。

「あれ、リムさん、クラウドさん、ミリアンヌさん！ 少し振りですね。何かの依頼の帰りですか？」

それは、ギルドの受付嬢のリムさんと、同じパーティで活動している冒険者のクラウドさんとミリアンヌさんだった。この三人はどういう組み合わせなんだろう？

「えーっと、こんにちはショーマさん。依頼というか、私達は調査の帰りですね。クラウドさんとミリアンヌさんは私の護衛依頼を引き受けてくださったんです」

疑問が顔に出ていたのか、リムさんがそう教えてくれた。

「そうだったんですか、お疲れ様です」

「お疲れ様です……って、そうじゃなくて！ あれはなんですか!? なんかよく分からない板みたいなものに乗ってましたけど!」

「え、見てたんですか？」

「はい、ここから見えたんですよ。ショーマさんとノアルさんがこちらに飛んできてる姿が僕達の姿が見えた？」

「ここから見ていて、よく僕達だと分かりましたね？　かなり高い所を飛んでいたと思いますけど……」

「私の職業スキルに、遠くの物が見えるスキルがあるんです。そのおかげで確認することが出来ました」

「スキルですか……なるほど、納得です」

へえ、リムさんはそういうスキルを持っているのか。

目が良いのって色々と役立ちそうだな。

「それで、あの板はなんなんですか？」

「僕が作りました。浮空石と魔石と鉄を使って」

僕はスカイボードの簡単な構造と、付与した魔法をリムさん達に話した。

あんまり細かく説明しているとキリがないので、ざっくりとだが。

「ふむ、浮空石を使った乗り物か。アイデアとしては面白いが、シヨーマのスキルあつての物かもしれないな」

クラウスさんはスカイボードについて褒めてくれたが、同時に僕にしか作れないであろうことも理解したようだ。

「ねえ、立ち話もなんだし、ギルドに戻らない？　詳しい話はそれからしましょうよ」

ミリアンヌさんがそう提案してきた。

確かに、話すならもつと落ち着いた場所がいいな。

「シヨーマさんとノアルさんもギルドに来ますか？」

「そうですね。道中倒した魔物の解体も頼みたいですし、報告したいこともいくつかあるので行くつもりです。ご一緒させてもらってもいいですか？」

リムさんの問いかけに僕はそう答えた。

「もちろんです。それでは行きましょうか」

それから僕達は解体場に赴いて今回の旅で倒した魔物を預けた。その中の魔物に討伐依頼が出ているなら、それを達成扱いに出来るということなので、今はその確認作業をギルドでもらっている。

その確認も、ギルドカードを見れば討伐記録が分かるので、すぐ終わるそうだ。

ちなみに解体場に魔物を預けに行った時、あまりの量にグラッドさんに驚かれ「こんなにいっぱいには無理だ！」と言われてしまったため、預けた魔物は僕らが討伐したうちの半分くらいだ。

ちなみに、現在進行形でリムさんにも驚かされている。

「シヨーマさんとノアルさん二人で、ウルフ系統が二十三匹、ゴブリンが二十五匹、爪熊が八匹、ブラッドサーペントが十四匹、終いにはオークが十四匹にオークジェネラルまで……普通こんな短期間に討伐出来る量じゃないですよ！」

「あはは……確かに大変ではありましたね」

「依頼もかなりの数を達成扱いに出来ますよ。ランクも恐らく上がると思います」

「それはありがたいです」

ランクも早く上がるに越したことはないから、早く上がるといういな。

「そういえば、ノアルさんを故郷に送り届けるみたいなのを言っていましたけど、故郷はどうなっていたんですか？」

「……ギリギリだったけど、シヨーマが救ってくれた。……そして、ノアルはこれからもシヨーマと一緒に冒険者することにした」

リムさんの質問にノアルはそう答えた。

「そ、そうなんですネ……それは、良かったです」
ん？

なんか一瞬、リムさんの顔が曇ったような気がしたけど、気のせいかな？

「えーっと、他にも色々と言いたいんですけど、いいですか？」

「あ、はい！ もちろんです！」

「それで、報告なんですけど……コレが関わることなんですけど、ここで話しても大丈夫ですか？」

僕は首を手で輪っかを作って囲むようなジェスチャーをする。

隷属^{れいぞく}の輪のことなんだけど、伝わるかな？

「……！ そうですか、シヨーマさんも知ってるんですね」

お、リムさんの反応を見るに、隷属の輪について知っているみたいだ。

「伝わって良かったです」

「その話をするとすると、ギルドマスターに伝えた方がいいですね……ちょっと待っていてもらっていいですか？」

そう言うと、リムさんはギルドマスターの執務室に向かうため、階段を上って行った。

「報告は終わったのか？」

「クラウスさん！ 報告したいんですけど、人が周りにいると話せないような内容なので、リムさんがギルドマスターの所に話をつけに行ってくれています」

「話せないような内容ってなんなの？」

「……コレに関する話」

今度はノアルが先程の僕と同じようなジェスチャーをする。

クラウスさんとミリアンヌさんもそれを見た瞬間反応を改め、真剣な表情を浮かべた。

「確かに、その話はギルドマスターにするべきだな。そうしたら、私達も同席していいだろうか？」

「そうですね、その方がいいと思います」

この騒動は恐らく、何か大きな争いを生むような気がする。

その時に、クラウスさんやミリアンヌさんが即座に対応出来るよう、早めに情報は共有しておくべきだ。

同じ理由で、ギルドマスターのユレーナさんにも話が出来るといいんだけど……
どうなるだろうか？

「シヨーマさん、ギルドマスターに許可をもらってきたのでこちらにどうぞ」

少し待っていると、ユレーナさんに確認が取れたようで、リムさんが階段を下りてきてそう僕らに声をかけてきた。

「私達も同席させてもらおうかと思っているんだが、いいだろうか？」

「はい、構いませんよ！ 今から話すことに關しては、後々一部の冒険者には通達することにしたので」

クラウスさんの言葉にリムさんはそう返した。

やっぱりギルド側も隷属の輪に關連したことについて動いているんだな。

それから僕達はリムさんに連れられ、ギルドマスターの執務室に向かった。

そこには既に元氣そうなユレーナさんがいた。

「お、来たね。それじゃあ、早速シヨーマ達の話聞かせてもらおうか」

すると早速報告を求められたので、僕とノアルはソルムの村であったことを報告していった。

「ふむ、ノアルの故郷である村を襲った魔物の大群の中に、隷属の輪が着けられた上位種やリリーダ―格の魔物達がいた……と？」

「はい、その首輪もいくつかは僕の手元にあります」

「そうか、分かった。報告感謝するぞ、シヨーマ」

「いえ、僕も冒険者ですから、当然ですよ」

報告を聞いたユレーナさんは、難しそうな顔をしつつも僕達に礼を言ってくれた。

「それにしても、向こうでは大活躍だったようだね」

「……シヨーマ、凄かった」

「いや、僕がやったのなんて本当に些細なことですよ。ノアルやソルムの村の皆さんが頑張っていたところに、僕が少し力を貸しただけですから」

「相変わらず謙虚だねえ……」

ユレーナさんが呆れたような表情で苦笑している。

自分の謙虚なつもりはないんだけどな……

「少し、いいだろうか？」

すると、クラウスさんが声を上げた。

「ん？ どうしたんだい、クラウス？」

「ここにいるメンバーなら大丈夫だとは思いますが、今から話すことは他言無用で頼む」

クラウスさんのその言葉に、皆が真剣な表情で頷く。

それを確認したクラウスさんは、ゆっくりと話し始めた。

「結論から言うと、今回の隷属の輪を巡った騒動は、スーガルフ帝国によるものだと思う」

「帝国の？ それはどこからの情報なんだい？」

「我が国の諜報部隊からの情報だ。帝国に潜入している者達が、魔物の研究をしている施設を発見したそうだな」

「帝国内にそんな所が……？」

魔物の研究って、いかにも怪しそうだな……

僕がそう思っている間にも、クラウドさんは更に話を続ける。

「その施設にも潜入したが、警備が厳重であまり深くは潜り込めなかったそうだ。ただ、そこまでも、怪しい研究資料や件の隷属の輪をいくつか発見したらしい」

「そんな施設があれば、ギルドでも何かしらの情報を掴んでいるはずだが……」

ユレーナさんがそう首を傾げながら口にする。

「最近になって、帝国が軍事にも力を入れていることは明らかだ。それに加えて、魔物を隷属させる魔道具の存在と、その魔道具をつけた魔物がノアルの故郷の村に襲撃してきたこと。この一連の騒動は繋がっているのではないかと私は思う」

僕もそう思う。

恐らくだが、ソルムの村を襲った魔物の軍勢は、帝国が人為的に起こした実験のようなものではないだろうか？

そう考えると、今までのことに辻褄が合うような気がする。

「……もし、そうだとしたら、許せない」

「ノアル……」

ノアルも同じ考えに至ったのか、目を細めて怒りを露わにした。

「確かに、それは許せることではないな。クラウドよ。この件をギルドのグランドマスターに報告してもいいかい？」

ユレーナさんがそう言うと、クラウドさんは意外そうな表情を浮かべた。

「ギルドが動くのか？ ギルドはどの国にも属さない中立の立場であるはずだが」

「確かにそうさ。だが、今回のような戦争を引き起こしかねないことに關しては、ギルドも黙って見ているわけにはいかない。グランドマスターもそう言うだろうね」

「そうか、分かった。だが、不用意な情報の拡散には気をつけてくれ」

「ああ、もちろんだよ」

冒険者ギルドが動くのか、それは心強いな。

冒険者ギルドは世界の各地にあり、影響力は国に匹敵すると言っているからね。

「一年前に皇帝が変わってから帝国には行っていないが、何が起こってんだろうねえ」

「どちらにせよ、今は不用意に帝国には近づかない方がいいわね。巻き込まれたらまったもんじゃないわ」

ユレーナさんとミリアンヌさんはそんなことを口にする。

「まあ、今考えても詳しいことは分からないな。また何か分かった時に改めて話をしよう」

そんなユレーナさんの言葉に皆頷き、話が一段落したので一度肩の力を抜いた。

真剣な話だったから、体に力が入っちゃったよ。

「改めて、報告感謝するよショーマ」

「いえいえ、力になれたようで良かったです」

「そういえば、リムから聞いたんだが、何やら面白い物作ったそうじゃないか？ リムには見せた

らしいし、良ければアタシにも見せておくれよ！」

「いいですよ。皆さんには隠す意味ありませんから」

ユレーナさんにそう言われた僕は、アイテムボックスからプルニーマとスカイボードを取り出した。

「これは、戦輪^{せんりん}かい？」

「形状としてはそうですね。ただ、こうやって魔力を流すと……」

「おっ、浮くんだね！」

「これは浮空石と魔石と鉄で作ってあります。浮いているのは浮空石の力で、魔石は付与した魔法を発動するための魔力タンクですね」

「その辺は魔道具と同じなのか」

それからプルニーマを一通り操作して見せ、その間にどんな付与がされているのかも皆に説明した。

「五つとも同時に動かせるのか……凄まじいな」

「対人戦で一對一だったらほとんどの人には負けないんじゃないかしら？」

説明を聞いたクラウスさんとミリアンヌさんから、そんな評価をもらえた。

僕もこれは結構自信作なので、ちよつと鼻が高い。

続けて、スカイボードの説明もしていく。

「これも使った素材はプルニーマとほぼ同じで、土台と足を乗せる部分の二重構造になっています。

足を乗せる所に吸着の付与がしてあるので、足を滑らせて落ちることはありません。土台の方にはシールドとウインドの魔法が付与してあって、風圧とかの問題もなく、加速も出来ますね」

「これはまた便利だねえ。誰でも乗りこなせるのかい？」

「僕とノアルは割とすぐ乗れましたね。高い所が苦手だと、飛ばすのはちよつと難しいかもしれませんが」

説明をした感じ、こちらも概ね好評みたいだった。

こういう反応をされると、やっぱり嬉しくなっちゃうものだね。

そんな新しく作った物の説明も程々に、僕は今後の方針として、とりあえずは今まで通り過ごし、何かあったら情報を共有するということを決め、この場は解散となった。

何も起こらないに越したことはないが、一応、僕も備えておかないと……

「はい、これが新しいギルドカードです」

「ありがとうございます」

「……ありがとう」

ユレーナさんへの報告も終え、受付まで戻ってきた僕とノアルは、ランクの上がったギルドカードをリムさんから受け取っていた。

ギルドカードの色は僕が赤色で、ノアルは黄色になった。

どちらも一気にランクが二個上がったわけだが、それ程までに今回倒した魔物は多く、かなりの

数の依頼を達成扱いに出来たようだ。

ユレーナさん曰く、もっと上げたいところだが、あまり早く上げ過ぎると反感を買いかねないのでこのくらいで留めておいたとのこと。

「まだ登録から一ヶ月も経っていないのに、赤ランクですか……シヨーマさんはやっぱり凄いです！」

「リムさんやゲイルさん、他にも沢山の親切な方と出会えたおかげですよ。本当にありがとうございます！」

「い、いえ。私なんて大したこととしてませんよ」

僕が素直に思っていることを口にする、リムさんは照れつつも嬉しそうにしてくれた。

「僕にとつてはとてもありがたいことを沢山してくれましたよ。リムさんには本当に感謝しています。今後もしよろしくお願いしますね」

「は、はい！ 任せてください！」

「それじゃあ、僕は行きますね。また明日もギルドに来ると思います」

「分かりました！」

そうしてリムさんと別れ、僕はギルドを出てすぐの所にある解体場へと向かう。そろそろ預けた魔物の査定が終わる頃だ。

「……むう」

「ん？ どうしたの、ノアル？」

なんだかノアルが少し複雑そうな顔をしている。

「……シヨーマはリムのことどう思ってる？」

「んー、頼りになる職員さんだと思うよ？ 本当に感謝してるし」

「……それもそれでどうかと思う」

「え？ どういうこと？」

「……なんでもない」

ノアルはそう言うと、僕の腕に自分の腕を絡ませてくる。

「……ノアルさん、めっちゃ見られているんですけど」

「……見せつけてやればいい」

この子、強心臓過ぎないか……？

まだ通りに人が多いから、凄い目立っている。

一部の男の人から怖い視線が飛んできているし……

ノアルと一緒にいる以上、こういうことにも慣れていかないといけないのかもしれない……

結局、ノアルは僕の腕を離してはくれず、腕を組んだまま解体場に着いてしまい、仕方ないのでそのままに入ってしまった。

すると、中に入っすぐの所に、椅子に座って飲み物を飲んでいる責任者のグラッドさんがいた。休憩中かな？

「坊主か。お、なんだ、相棒と随分仲がいいな」

「あはは……お疲れ様です、グラッドさん。ギルドで少し時間を過ごしたので、一応、来てみました」

「そうか。とりあえずお前が預けてきた魔物の査定は終わったぞ。解体は全然進んでいないがな」

「お手数をおかけしてすみません……そこまで急ぎではないので、解体場の人達のペースで大丈夫です。なんなら、今日出来なさそうでしたら、僕が回収しますよ？」

「おうおう、職人なめるなよ坊主。流石にお前さんが持っている量を一気に全ては無理だが、一度引き受けるって言った分はキッチリやり通すぜ」

グラッドさんは不敵な笑みを浮かべながらそんな風に言う。

「それに、新人の奴らの練習にもなっているからありがたいな。とりあえず、さつき預かった魔物の代金は渡す。そいつらの解体が終わって場所が空いたら、リムにでも伝えておくから残りのやつを預けに来てくれ」

「分かりました。苦労かけていると思うので、今度なにかお返ししますね」

「若造が。んなこと気にしないでいいんだよ。こっちも好きでやってるんだからよ。ほら、代金持ってけ」

ぶっくらぼうにそう言い放つグラッドさんからお金をもらい、そのお礼を言っ僕達は解体場を後にした。

「ノアル？」

「……ん？」

「僕、これから行きたい所あるんだけど、先に宿に戻っておく？」

僕は解体場の前でノアルにそう尋ねた。

「……シヨーマについて行く」

「分かった。じゃあ行くか」

これから行くのは僕にとつて、とても重要な場所だ。

今も、少しドキドキしている。

「……どこに行くの？」

緊張を悟られないよう気を付けながら、ノアルに行き先を告げる。

「教会だよ」

「……教会？ シヨーマは教会の信者なの？」

ノアルは首を傾げながらそう聞いてきた。

「んー、信者かどうかは分からないけど、女神様のことは信じてるよ」

「……そうなんだ」

「ノアルはそういう宗教とかには無関心なの？」

「……ん、ノアルは宗教とか分からない」

そうなのか。

どの国にも宗教的なものはあるものだと思っていたけど、獣人国にはないのかな？

それからノアルと色々と話しているうちに教会に辿り着いた。
おー、なんか、ザ・教会って感じの見た目してるなあ。

決して華美なわけではないんだけど、なんとなく安心するような美しさを感じる。

ノアルも何か感じるものがあつたのか「……おー」と言つて教会を眺めていた。

「それじゃ、中に入ろうか」

「……ん」

眺めるのも程々にして、僕達は教会の中に入った。

おお、中もとても綺麗だな。

まず真ん中の通路の左右には木製の長椅子がいくつも置かれていて、通路の奥には女神フォルティを模した大きな像が置いてある。

かなりの再現度だな。

凄く細かいところまで作り込まれている。

けど、やっぱり実際に会つたフォルティの方が綺麗だったと思う。

そんなことを思いつつ、僕達が祈りを捧げるスペースまで歩いていくと、僧侶のような服装で、桃色の髪を携えた女の人が、祈りを終えて立ち上がるところだった。

その女の人は、立ち上がって女神像をじっと見つめた後、その場で回れ右をしてこちらに歩いて来た。

そのまますれ違おうと思つていたが、その女の人は僕を見て足を止めた。

どうしたんだろう？

「えっ、あなたは……？」

その女の人は、小さく何かを呟いたかと思うと、そのまま僕の方へまっすぐ歩み寄つてきた。

な、なんだなんだ？

「み、御使い様ですか!？」

「は、はい？」

「あなた様からとても大きい神聖な力が見えます！ 教会の人達などより全然大きいです！」

近づいてきた女の人は、鼻息荒くそう言つと、グイッと体を寄せてきた。

ど、どうしたんだろうこの人は？

僕は御使いなんかじゃないんだけど、なにを勘違いしているんだろうか？

「えーつと、すみません。僕は御使いなどではなくて、普通の冒険者なんですけど……」

「え、そ、そうなんですか？ 私も冒険者ですけど、あなた様程の神聖な力を持った人は見たことありませんよ？」

この人、冒険者なのか。

僧侶服を着ているから、教会関係者かと思つた。

「それは僕が新人だからじゃないですかね？ あ、名前はシヨーマといいます」

「シヨーマ、さん……？ もしかして、クラウスさん達が言つていた？」

まさかの知り合いの名前が出てきた。

「……あ、もしかしてこの人は。」

「もしかして、あなたは……」

「あ、はい。私はマイヤと申します。クラウドさん達のパーティで活動させてもらっている者です」

これは驚いた。

クラウドさん達から名前だけは聞いていたけど、まさかこんな所で会うなんて思ってたな。

「そ、それで、ショーマさんは何でそんなに大きな神聖な力を持っているんですか？」

お互いの素性を明かしたところで、改めてマイヤさんがそう聞いてきた。

「いや、分からないです。そもそも神聖な力があるってどうやって判断しているんですか？ 僕には全く自覚がないんですが……」

「えっと、それはですね。私のスキルの一つに神聖眼しんせいがんというものがあって、その目を通して人を見ると、その人が良い人か悪い人かみたいなことだったりが見えるんです。それに付随して、敬虔けいけんな神の信者の人とかが持っている神聖な力も見えます」

なるほど、そんなスキルがあるのか。

僕にそこまでの神聖な力があるのかはまだよく分からないけど。

光魔法は使えるけど、それだけが理由じゃないよね？

「とにかく、僕は御使いなどではないですよ。身に余る力を持っていたりはしますが」

「そ、そうですか……」

僕の言葉を聞いたマイヤさんは、あまり納得いつてなさそうだったけど、今はやることがある。

「僕も色々聞きたいことがあるんですけど、とりあえず少し祈りを捧げてもいいですか？」

「あ、はい、もちろんですっ。ごゆっくりっ」

「……いつてらっしやい」

マイヤさんとノアルに断りを入れた僕は、女神像の前で片膝をつき、両手を胸の前で組み合わせ祈りの姿勢を作った。

そのまま、頭の中で女神像に向かって呼びかける。

(フォルティ、聞こえてる？)

「はい。聞こえていますよ、匠真しんまさん」

そう呼びかけると、すぐ近くから返事がきた。目を開けると、いつの間にか僕は、以前フォルティと話していた空間にいた。

「……なんか少ししか経っていないのに、凄く久しぶりのような気がするな」

「ふふ、それだけこの世界を楽しんでくれているということですね。来てくれて嬉しいです、匠真さん」

フォルティは慈愛を感じさせる微笑みを浮かべながらそう言ってきた。

「僕もまた会えて嬉しいよ。こっちではいい人達と沢山出会えて、凄く充実してる」

「それは良かったです！」

「色々話したいことはあるんだけど、とりあえず、フォルティに会ったら聞きたいと思っていたこ

とがいくつかあるんだ」

「それでは、どうぞこちらに」

フォルティがそう促した先には、いつの間にか机と椅子が出現しており、僕はフォルティと向かい合う形で席に着いた。

「えーっと、まずは今さっきのことなんだけど、神聖眠っていうスキルを持っている人と会ったんだ。その人が言うには、僕に大きな神聖な力があるんだって。どういうことか分かる？」

「んー、それは恐らく、匠真さんの加護に反応したんじゃないですかね？」

「え、加護って隠蔽^{いんぺい}されてるんじゃないかったの？」

以前、加護をステータス画面で見た時、確かそう書いてあったはずだ。

「されていますよ。ただ、神聖眼のスキルは少し特別です。あのスキルは、私に対して真っ直ぐな気持ちで祈りを捧げたり、信じてくれたりした一部の人間に私が授けているものです。加護とは分

からなくとも、とても大きな神聖な力を持っているように見えることはあると思います」

フォルティが直接授けているのか。恐らく凄^{すご}いことなんだろうな。

「加護を持っている人って他にいないの？」

「はい、匠真さん以外の人間ではないですね」

「……それって大丈夫なの？」

「……………大丈夫です！」

なんか間^まがあっただけだ。

「……本当に大丈夫なの？」

「うっ……………だ、大丈夫じゃないかもしれないような……」

「……他に加護持っているのってどんな存在がいるの？」

「……私の眷属^{けんぞく}の子だけなので、みんな神の立場ですね」

おう……………そんな大層なものだったのか、加護って。

「それだと僕って今、どんな立場になってるの？ 人間なの？ 神様なの？」

「……匠真さんは人間でありながら加護を持っている存在なので、半神^{ミョウシン}と呼ぶべき存在だと言えます……もしかしたら、その辺の三等神とかよりも神聖な力は強いかもしれません……」

「……聞いてないんだけど？」

「……………」

フォルティは先程から僕から目を逸らし続けている。こら、こっちを見なさい。

「はあ……………別に怒ってないから、ちゃんと説明して？ 半神になったことなに起こるの？」

「えっと……………半神といっても、加護を与えられたらほとんど神と同じなので、まず寿命とかはなくなり、老化もしないと思います。ほ、本当はもう少し時間が経ったらそのことを説明して、匠真さんに新しい神になってもらおうと思っていました……」

……………んでもないことを告げられたんだだけ。え、なに、僕もう死なないの？

「なんで、言ってくれなかったの…………？」

「言ったら絶対、断られると思ったんです…………でも、私達最高神としては是非、匠真さんには新し

い神になってもらって、いずれは私達と同じくらいの立場になって欲しいんです……！」

「……そのことは前にもチラツと聞いたけど、そういう思惑があって加護を授けたなら、話しておいて欲しかったなー」

「……すみません」

本人の同意なく不老不死にされるってどうなの？

「そうすると、地上にはあとどれくらいいられるの？」

「その点に関しては匠真さんにお任せします！ 百年でも、千年でも、もついてもらってもいいです！ 満足するまでいてもらって、それから神になってもええたらと、こちらとしては考えてたので……」

えー、神になるのか、僕……少し前までただの高校生だったのに、いきなり神に昇格するって、なにが起こればそんなことになるんだろうか。

「……まあ、フォルティの考えは分かったよ。でも、答えを出すのは待ってもらっていいかな？ それとも、僕が神になるのはもう決定事項？」

「い、いえ！ そんなことないです！ あくまで最終的な決定は匠真さんがすることなので！ 加護を与えた一番の目的は、想定外の事態が起きて匠真さんが死んじったりしないよう、早めに強くなってもらうためですから」

「あ、寿命はないけどやっぱり死ぬことはあるんだ」

「そうですね。流石に完璧な不死の体には出来ないので、心臓が潰れちゃったりしたら死んでしま

います」

とは言っても、寿命がないってだけでも十分やばいけどね。

「じゃあ、その話はまた今度にしよう。今考えても答えは出なさそうだから」

「はい、ゆっくり考えてください。こちらから答えを急かすことはないので、決断は匠真さんに委ねます」

「分かったよ。……ちなみに、他に何か隠してたりしてない？」

「ないです！ 絶対に！ 神に誓います！」

いや、フォルティが神でしょ。

神が神に誓うってどうなのよ。それにしても、僕が神かぁ……ちゃんと今後のことを考えておかないとなぁ……

とんでもない事実を聞かされる羽目になったが、その話も一旦まとまったので、その後も僕は聞きたかったことをフォルティに聞いていった。聞いた内容としては、僕の職業がかなり規格外だった点や、スキルポイントのシステムのこと、なんでスキルに家事が最初から付いていたのかなどだ。まず、僕には『鍛冶師』『魔導師』『武神』の三つの職業が与えられている。いずれもチート級の力があり、他人に明かす際は口外しないよう言い含める必要があるほどだ。

なぜここまで規格外にしたのか聞いてみると……さっきも言われたことなのだが、簡単に死んじやったりしないように、強めに設定したらしい。

「過剰じゃない？」と言ったところ、「これでも不安なくらいです！」と返されてしまった。

次に、スキルポイントシステム。これはレベルが上がるとスキルポイントが得られ、職業のレベルを上げたり、新しいスキルを取得出来たりするという仕組みで、普通ならスキルをこんなに簡単に得られないことは、周囲の人と話して確認済みだ。

このシステムは、僕が単純に楽しめるように、そして不便しないように設けたもので、「こんなスキル欲しいな」となった時に、簡単に取れるようにしたそう。大分反則な気はするが、助かっていることは間違いないので、これは素直にありがたうと言っておいた。

それで最後に家事スキルなのだが、転生してからの僕はまだ料理くらいしか家事はしていないけど、これがやたら上手く出来た。これはどうやら、僕の前世の経験から来たものだそう。

効率よくやろうと掃除について色々と考えたり、父さんに美味いものを食べて欲しくて料理はかなり頑張ったりしたから、その成果かな？

そんな感じで聞きたいことも大体聞けたのだが、気付けばかなりの時間話し込んでいた。

「フォルティ？ ここに来てからどれくらい経った？」

「んー、匠真さんの感覚で言うと一緒に経ちますかね？」

「もうそんな経ってたの!? ごめん、そろそろ戻るね！」

「ふふ、慌てなくても大丈夫ですよ匠真さん。向こうで意識を取り戻した時に、数分しか経っていないようにしますから、安心してください」

「ほんと？ それは助かるよ、ありがたうフォルティ」

良かった、ノアルとマイヤさんを一時間も待たせる羽目にならなくて。

「いえいえ。あの、また来てくださいね？」

「うん、定期的に来るようにするよ」

「ありがとうございます！ それじゃあ、また」

フォルティの言葉を最後に、僕の視界は光に包まれていった。

目を開けると、そこは教会の女神像の前だった。戻ってきたみたいだな。

祈りの姿勢を解き、立ち上がった僕は、女神像に向かって、頭の中でまた来るよと呟き、後ろに下がった。

「……終わった？」

すると、近くの席で座って待っていたノアルがぴょんと立ち上がり、こちらに寄ってきた。

「うん、終わったよ。待たせてごめんね？」

「……そんなに待ってないから大丈夫」

うん、フォルティが言っていた通り、時間はそこまで経ってないみたいだ。良かった良かった。

「あの、シヨーマさん？」

「あ、マイヤさんも待っていてくれたんですね」

「あ、はい。シヨーマさんがどんな風に祈りを捧げるのか気になったので」

祈りの体勢を熱心に見られていたと思うとちょっと恥ずかしいな。

「そうですか。お待たせしてすみませんでした」

「いえ、いいんです。私が勝手に見たいと思っただけなので。それに、ノアルちゃんと話してたのでそこまで退屈じゃなかったですし」

「……マイヤはいい人」

「ふふ、ありがとうノアルちゃん」

お、なんだか仲良くなってる。ノアルって意外と人と仲良くなるの早いよね。口数は多くないんだけど、なんでだろうか？

「あ、それで、シヨーマさんの祈っている姿見たんですけど、凄かったんです！ 元々大きかった力が更に大きくなって……もう言葉で言い表せないくらい凄かったです！」

とても興奮した様子でマイヤさんが詰め寄ってきた。そ、そんなに凄かったのか。

「マ、マイヤさん、ちよっと近いです……」

「……マイヤ、近い」

「はっ!? す、すみません！ あ、あまりに凄かったものですからちよっと興奮してしまつて……ご、ごめんねノアルちゃん。さっき話してたようなことじゃないからね？」

「……分かつてる」

マイヤさんはノアルに謝りながら僕から体を離れた。「さっきの話」ってなんだろうか？ 僕が関係してることなのかな？

「ノアル、さっきの話って？」

「……秘密」

だが、ノアルに聞いても教えてもらえなかった。

「えー、なにさ？ 気になるなあ」

「……秘密は秘密」

「シヨーマさん、ダメですよ？ 女の子の秘密を詮索するのは」

「そういうものなんですか……」

マイヤさんにも窘められてしまった。まあ、誰にでも聞かれない秘密の一つや二つくらいあるよね。……僕なんていくつ隠し事があるか分かんないし。

「それじゃあ、宿に行こっか？」

「……ん」

「マイヤさん、それでは僕らはそろそろ行きますね。ギルドとかで会ったらまた話しましょう」

「あ、はいっ。そういえば、シヨーマさん冒険者なんですよね……あんなに大きな力持っていると教会関係者にしか思えないんですけど……」

「マイヤさんは教会関係者というわけではないんですか？」

「はい、私は個人的に女神フォルティ様を信仰しているだけです。勧誘は凄く来るんですけど、今のところ受けるつもりはありませんね」

「そうなんですか」

勧誘とか来るんだな。

「シヨーマさんも少し気を付けておいた方がいいですよ。あそこまで大きな神聖力を持つてると分

かったら、必ず教会は勧誘に来ると思います」

「ご忠告感謝します。僕も当分は冒険者としてやっていくつもりなので、勧誘が来ても断らせてもらいます」

「その方がいいと思います。それじゃあ私も宿の方に戻りますね。またお話、聞かせてください」

「お手柔らかにお願いします」

「……ばいばい、マイヤ」

僕は教会前でマイヤさんと別れ、宿である『みけねこ』へと足を向けるのであった。

2 帰ってきたみけねこ

「……戻ってこられて良かった」

「そうだね。約束、破らずに済んで良かったよ」

教会でマイヤさんと別れた僕は現在、宿屋みけねこの前に立っていた。

僕は、この宿を経営する夫婦であるミルドさんとララさんの娘、ミラルちゃんに、獣人国へ行く前に必ず帰ってくると約束をした。

少し予定よりは遅くなったものの、その約束を果たすことが出来、僕とノアルは笑顔で顔を見合わせ、一緒に宿の扉を潜_{くぐ}っていった。

「いちつしやい……つて、ショーマ！ それにノアルも！ 帰ってきたのか！」

そんな僕達を受付カウンターにいたミルドさんが迎えてくれた。

「ミルドさん、お疲れ様です。先程、戻ってきました」

「……ただいま」

「おう、おかえり。ここに來たつてことは、また泊まってくれるのか？」

「はい。空いているなら泊まらせていただこうかと思っています」

「恐らく泊まれると思うが、ちょっと待っててくれ。確認してくる」

「よろしくお願いします」

ミルドさんはそう言つて、部屋の空きがあるかを確認し始めた。

「うん、泊まれるな。部屋はどういう形で取る？ 生憎_{あいにく}、ベッドが二つある部屋は埋まっ
ていて、大きなベッドが一つの二人部屋か、普通の一人部屋を二つ取るかだが、どうする？」

「それじゃあ、一人部屋を……」

「……二人部屋で」

僕の言葉に割り込む形で、ノアルがミルドさんに二人部屋をお願いしてしまった。

前も似たようなやり取りをした気がするな……

「二人部屋だな。したら、これ鍵な。もうすぐ夕飯だから、部屋で少しくつろいでいるといい」

それからミルドさんから鍵を受け取り、僕は部屋へと向かった。

鍵に記された番号と同じ部屋の扉を開けて中に入ると、大きなベッドが一つ置いてあり、二人が

けのソファのような椅子に、テーブルもあって、そこそこ大きな部屋だった。

「いい部屋だね」

「……ん、確かに。それに……」

「それに？」

「……また、シヨーマと一緒に寝られて嬉しい」

ノアルは僕の顔を真つ直ぐ見つめて、そんなことを言ってきた。

……流石に面と向かってそう言われると照れるな。

ノアルは平然としているけど、僕は思わず目を逸らしてしまった。

「……ふふ、シヨーマ可愛い」

「可愛いって……僕、男なんだけど？」

「……だったら、ちゃんと目を合わせてみて？」

うっ……

それはちよつと困る……

恐らく、僕の顔はまだ赤くなっていると思うから。

けど、ずっと目を合わせないと評価が変わらないだろうし、ここは勇気を振り絞って……！

コンコンコンコンッ！

意を決して目を合わせようとした僕だったが、ノック音に氣を取られて、扉の方に目を向けた。

それにしても、中々強めのノックだな。

一体、誰だろうか？

そう思いつつ扉を開けると、小さな影が僕達目がけて飛んできた。

「シヨーマお兄ちゃん！ ノアルお姉ちゃん！ お帰りなさい！」

その影の正体はミラルちゃん、飛んできた勢いのまま僕達に抱きついてきた。

「おっと！ ミラルちゃん、ただいま！」

「……ただいま、ミラル」

飛んできたミラルちゃんを僕とノアルで受け止め、頭を撫でる。

すると、ミラルちゃんは嬉しそうにしながら、抱きつく力を強めてきた。

約束通りに帰ってこられて本当に良かったな。

やっぱり僕は、こういう温かさを感じられる瞬間が一番好きだ。

「ところで、ミラルちゃんは僕らに会いたがためにここに来たのかな？」

「はっ!? そういえば、ご飯が出来たので呼びに来たのです！」

ミラルちゃんは「忘れていました！」といった表情を浮かべながら質問に答えてくれた。

「そっか。ありがとう、呼びに来てくれて」

「……ん、ミラル偉い」

「ほわ……いい、いいんです、これがミラルの仕事なのですから……」

僕達が褒めながら頭を撫でると、ミラルちゃんは、嬉しさと恥ずかしさが混ざったような表情を浮かべて、されるがままになった。

少しの間そうしていたが、名残惜しそうにしながらミラルちゃんの方が僕達から体を離れた。

「じゃ、じゃあ、他の人達にも知らせて来ます！ ご飯が終わったら、お出かけの話聞かせてね！」

「うん、分かったよ。気を付けてね」

「……頑張れ」

「はい！」

そう元気に返事をして、ミラルちゃんは僕達の泊まる部屋から出て行った。

そういうば、昼ご飯は一応食べたけど、そこまで食べたわけじゃないからお腹空いたな。

「僕らも行くか」

「……ん、お腹空いた」

ノアルも同じだったようで、ご機嫌そうに尻尾を動かしながら僕の前を歩いて行く。

それから食堂に入ると、既に何人かの宿泊客が食事を取っていた。

僕達も席に着くと、ミルドさんとミラルちゃんがお飯を持って来てくれた。

早速、運ばれてきた食事を口に運ぶと、思わず笑みが溢れてしまった。

相変わらずこの宿の食事は美味しいな。

「お、シヨーマにノアルじゃねえか！」

それから僕達が食事を楽しんでいると、この世界に来たばかりの僕にとっても親切にしてくれた冒険者のゲイルさんが嬉しそうに声をかけてきた。

「帰ってきてたんだな！」

「はい、先程帰ってきました」

「無事で何よりだ！」

ゲイルさんとの再会を喜び、折角なので一緒にご飯を食べることとなった。僕は食事を楽しみながら、ゲイルさんに今回の旅で起こったことを話していた。

「はあー、オークジェネラルと戦っても楽勝か！ シヨーマだけじゃなく、ノアルも十分な実力があるみたいだな！ オークジェネラルを一撃で倒せる火力があるのは羨ましいぜー」

「とは言っても、ゲイルさんも一人で倒せますよね？」

「まあ、倒せるが、一撃ってわけにはいかねえな。端から削っていく感じになるだろうから時間がかかると思うぜ」

やっぱり、ゲイルさんもオークジェネラルは普通に倒せるのか。

あのレベルをタイマンで倒せるのは、流石銀ランクの冒険者といったところだろう。

「なんの話してるんですか？ ミラルも交えて欲しいのです！」

「シヨーマさん、ノアルさんお久しぶりです。本当に戻ってきてくれたんですね」

「お、なんだ？ みんな集まってるな」

食事を食べ終え一息ついた頃には、ミラルちゃんとウラさんが厨房から出てきて、ミルドさんも受付から食堂に来て、僕らの会話に参加し始め、一気に大人数になった。

話す内容としては、やはり僕達の旅の話が中心である。

「……それで、怪我した人達をシヨーマが全員治しちゃった」

「シヨーマお兄ちゃん凄い！」

「……そのあと、魔力切れで倒れた」

その中で、ノアルは僕が回復魔法を使いすぎて倒れた話もした。

後悔はしてないけど、ちょっと情けないなあ……

「大丈夫だったの？」

「……二日くらい、寝たきりになった」

「それは随分無茶したみたいだな。俺はまともな戦闘をした経験はないが、魔力切れは辛いもんだと聞くぞ？」

ミルドさんがそう聞いてくる。

「あはは……確かに苦しかったですね。でも、それで皆を救うことが出来たので、後悔はないです」

「シヨーマはもつと自分を大切にしないとダメだな」

ゲイルさんのその言葉に、ここにいた僕以外の全員がうんうんと頷いた。

「ノアルにも言われました。今思うと、確かに無茶をした自覚はあるので、そこは反省しています」

「お兄ちゃん、もう大丈夫なの……？」

ミラルちゃんが心配そうにそう聞いてきた。

「うん、もう大丈夫だよ」

「お兄ちゃんがいなくなったらミラルは悲しいです！ だから、無理はしないで！」

「ミラルちゃんにも言われたら、下手に無理することは出来ないね……」

「ふふ、そうですよ。もちろん私も同じ気持ちです」

「ああ、俺もだ」

ララさんもミルドさんも続けてそんな風に言ってくれる。

「皆さん……ありがとうございます。なるべく、心配させないように頑張りますね」

……本当に、この街の人は温かい人ばかりだな。

僕のために想って言ってくれているということが、しっかりと伝わってくる。

結局その後も、かなりの時間話し込んでいたのだが、夜更かしも良くないということで、今日のところは解散になった。

それから僕とノアルは部屋に戻り、寝るための準備を始めていたのだが、少し問題が起こった。

「……シヨーマ、ノアルの荷物出して欲しい」

「うん、分かったよ。確かに出しておいた方がいいよね」

ソルムの村を出るに当たって、ノアルは自分の荷物（主に服）をまとめて持ってきていた。

流石に手で持って行くと邪魔になってしまうので、僕がアイテムボックスで預かっておいたのである。

アイテムボックスから、ボストンバッグのような形状をした鞆かばんを取り出し、ノアルに手渡す。

「……ありがとう」

「お安い御用だよ……って！ なにやってんの!?」
「？ ……着替える」

「いきなり僕の前で着替えないで!」

「……シヨーマなら、見ててもいい」

「終わったら背中叩いて!? 『サイレンス』!」

僕は生活魔法の一つで周囲の音を消すサイレンスを使い、ノアルに背を向けた。

この魔法は、音を通さない空間を作り出すことで、その空間の中の音は聞こえるが、外の音は完全に遮断するという便利な魔法だ。

この魔法を使っておけば、衣擦きぬずれの音も聞こえないので、変に意識することもなくて済むだろう。
「……むう」

サイレンスをかける直前、ノアルの不満そうな声が聞こえた気がするが、無視する。

それから待っていたのだが、着替え終わったノアルは僕の背中を叩くのではなく、のしかかるようにして存在をアピールしてきた。

「わっ……え、えっと、着替え終わった?」

「……ん」

何はともあれ着替え終わったとのことなので、サイレンスの魔法は解除した。

「随分と薄手だね。似合ってはいるけど、寒くない?」

「……寝る時暑い嫌だから」

「そっか」

僕もパジャマを買った方がいいかな。

生活魔法で綺麗に出来るから、シャツで寝てたけど、寝やすい服の方が睡眠の質は上がりそうだ。

「それじゃあ、そろそろ寝ようか。話し込んでたら結構遅くなっちゃったし」

「……一緒にベッド、久しぶり」

確かに、ソルムの村では僕は一人で寝ていたから、一緒に寝るのは久しぶりだな。

……一緒に寝るのが当たり前になっちゃってるのは、ノアルの思い通りなんだろうなあ。

内心そう思っていると、ノアルが先にベッドに飛び込み、僕は部屋の灯りを消した後、その隣にゆっくりと仰向けで寝そべった。

そうして僕がベッドに入ると、ノアルがもぞもぞとこちらに近づいてきて、ピッタリと寄り添ってきた。

「……ノアルさん? 暑くなるの嫌って言ってませんでしたか?」

「……それとは別」

「分かったから、足を絡ませてくるのはやめて……」

「……嫌?」

「嫌ではない、けど、僕の安眠のためにお願いしたいかな……」

「……ん、分かった。……寝てる時に無意識で何かしちゃったらごめんね」

「出来ればやめて欲しいけど、無意識だったら怒ったりはしないよ」



「……ん」

「それじゃあ、おやすみ」

「……おやすみ」

僕はそんなやり取りをして、眠りについた。

……翌朝、結局起きた時にノアルに抱き枕のように横から抱きつかれていたのはご愛嬌である。あいぎょう

ハゾットに戻ってきて数日が経ち、その間は依頼をこなしたり、街で買い物をしたり、ユレーナさんに捕まって模擬戦をしたりと、平和(?)な日々を過ごした。

ちなみに、模擬戦は今回も負けました。

プルニーマを使ったので、前回よりは断然善戦はしたものの、最終的には押し切られてしまった。そしてその間、特に帝国関係の異変も聞かず、ギルドとしても調査が続いているようだ。

そんなある日、依頼をこなそうとギルドに来た僕達の所に、クラウスさんがやって来た。

「あ、おはようございますクラウスさん」

「ああ、おはよう。いきなりで済まないんだが、少し話す時間はあるか?」

「あ、はい。まだ依頼を受けたわけではないので、大丈夫ですよ」

「そうか、では邪魔にならない所に行こう」

クラウスさんの案内で、僕はギルドの隅の方移动到る。

そこで話を聞くことになったのだが、一体何なんだろうか?

「まず聞きたいのだが、明日は何か予定があるか？」

「いえ、特にはありませんね。依頼をこなすか、街で買い物でもしようかと思っていました。明日、何かあるんですか？」

「ああ、単刀直入に言わせてもらうが、明日、この街の領主に会ってもらいたいのだ」

「領主様、というと……」

「ああ、私の兄だな」

領主様か……

度々噂などは聞くが、実際会ったらどんな人なんだろう？

「もちろん、お呼びとあらば会わせていただきます」

「そこまでかしこまらなくとも大丈夫だと思うぞ。兄はその辺りのことは気にしないからな」

「そう言ってもらえると助かります」

貴族なのに、気にしないんだな？

まあ、弟のクラウスさんが冒険者だから、平民の振る舞いにそれなりに理解があるのかもしれない。

「兄はお前にぜひ会いたいと言っていてな。昨日、王都から帰ってきたのだが、開口一番がその発言だったのは驚いた」

「そこまで僕のことを気にしてくださっているんですか？」

「魔道具で報告した際にも色々と聞かれたからな……」

「そうなんですな……」

クラウスさんは多少、ゲツソリした表情でそんなことを言ってきた。

根掘り葉掘り聞かれたんだろうな……

「そうしたら、明日の昼前に領主邸の前まで来てくれ。門番には来客があると伝えておく」

「会うにあたって、何か気を付けることとかはないですかね？」

「特にはないな。服装もそのままで大丈夫だろうし、言葉遣いに関しては、お前は元々丁寧だから気にしなくても大丈夫だ」

「分かりました。明日の昼前に伺わせてもらいますね」

「ああ、よろしく頼む」

領主様かー、一体どんな人なんだろう？

不安もあるけど、ちょっと楽しみだな。

僕とノアルは現在、この街の領主様に会うために、その邸宅の前に来ている。

そこで門番の人達に止められてもいる。

「君達は何者だ？ この領主邸に何の用事で来た？」

「僕はショーマと言います。昨日、クラウスさんにこの場所へ来るように言われたため、来させてもらいました」

「……ノアルも同じ」

「……！　そうか、失礼した。話は聞いているから通るといい」

高圧的な態度で止められはしたものの、名乗ったらすぐに分かってくれた。ちゃんと話が通っていたみたいだ。

そして、領主邸の門を潜り少し歩くと、この前ここに来た時に見かけた執事の人が、綺麗な姿勢で玄関口の扉の前に立っていた。

「シヨーマ様とノアル様ですね？　ようこそ領主邸へ。私はこの屋敷の執事長を務める者です。早速ですが、我が領主の所まで案内いたしますので、私についてきてください」

「分かりました。よろしく願います」

綺麗な所作で出迎えてくれた執事長さんの案内のもと、僕達は屋敷の階段を上り、廊下を進んでいく。

そうして案内されたのは、二階の廊下の突き当たりにある、一際大きな扉の前だ。

いよいよ、領主様と会うのか……

粗相そそうのないようにしなくては。

——コンコンッコンコンッ。

僕がそわそわしていると、執事長さんは扉をノックした。

「旦那様。シヨーマ様とノアル様が参られました」

「ああ、入ってくれ」

中から返事が聞こえ、執事長さんが扉を開けてくれたので部屋に入る。

そこはまさしく執務室といった造りで、大きな執務机と、部屋の左右には何かの資料や本がたくさん詰まっている棚が置いてあった。

そして、執務机の横にはクラウスさんとミリアンヌさんが立っていて、その二人に挟まれる形で、一人の男の人が執務机の前に立っていた。

その人はクラウスさんと同じ金髪だが、長さはクラウスさんより断然短い。

目元や口元もかなり優しげで、クラウスさんの兄にしては凄く若く見える。

なんなら、クラウスさんの方が兄に見えるくらいだ。

正直、イメージしていた領主様の風貌ふうぼうとはかけ離れていた。

「初めまして。シヨーマ君にノアル君。僕はこの街の領主をしているニコラス・ハゾットだ」

僕達を見たニコラス様は、にこやかに微笑んでそう挨拶あいさつをしてくれた。

「初めまして。シヨーマ・ケンモチと申します」

「……ノアル、です」

僕達もちゃんと挨拶を返す。

にしても、ノアルが敬語を使うのは珍しいな。口数は少ないけど、一応の体裁ていさいは保とうとしてくれているのかも。

「ああ、口調とかは気にしなくていいよ。君達のことは弟のクラウスから聞いていて、ぜひ話してみたいと思っていたんだ。だから、自然体でいてくれないか？」

「そう言ってもらえるとありがたいです」

「……ん」

クラウスさんとかミリアンヌさんもそうだが、貴族でも口調や態度を気にしない人が多いな。

まあ、冒険者を相手にすることも多いって言っていたし、多少無礼でも気にならないのだからか？

「立ち話もなんだし、座ってくれ。もう少ししたら紅茶の用意も出来ると思うから」

「わざわざありがとうございます」

ニコラスさんに促され、僕は礼を言いながら用意されていたソファに座る。

その前には長方形の対面机があり、上座にニコラスさんが座り、僕とノアルの対面にクラウスさんとミリアンヌさんが座る形となった。

そうして僕達が席に着いたタイミングで、執事長さんが紅茶を準備してくれたのだが、初めて見るちゃんとした執事の人のテキパキとした動きに少し感心してしまった。

「さて……今日、君達を呼んだのは、この街を統べる者として、力のある冒険者や商人とは顔を合わせておきたいというのが一つだ」

「その言い方だと、他にも理由があるんですか？」

「うん、もう一つの理由は……」

少し間を置いて、ニコラスさんがこちらを見つめる。

一体、もう一つの理由ってなんなんだ……？

「……単純に興味があつてね！」

「……え？」

凄く良い笑顔でニコラスさんがそう言い放つと、クラウスさんは腕を組んで大きなため息を吐き、ミリアンヌさんは困った人を見るような目をニコラスさんに向けていた。

「はあ……すまないなショーマ。兄は人一倍、好奇心が旺盛で、自分が気になったことに関しての行動力は凄まじいものがあるんだ」

「そう、なんですわね」

「それがニコラスさまが領主に認められた理由でもあるのだけだね。知識は時に武力よりも求められることがあるから」

なるほど、ニコラスさんは文官タイプの人なんだな。

確かに、貴族には腕っぷしよりもそちらの方が必要となることが多いだろう。

「まあまあ、僕のことはいいいじゃないか。今、僕が聞きたいのはショーマ君達のことだよ」

「期待に沿えるかは分かりませんが、僕が答えられる範囲なら何でも答えますよ」

「ありがとう！ それじゃあ、まずは……」

それから僕は職業について色々聞かれた。

魔導師はミリアンヌさんもそうだからともかく、僕のユニーク職業である鍛冶師と武神については掘り掘り聞いてきて、凄い熱意を感じた。

挙げ句の果てには、物を作るところを見せて欲しいとも言われたので、許可を取って作業台をアイテムボックスから出し、その上でロングソードを作った。